

---

# ハル

エバンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハル

### 【Zコード】

Z6340F

### 【作者名】

エバンス

### 【あらすじ】

「普通」の定義を「特別ではない」とするならば、僕は間違いなく普通の高校生だと思っていた。高校最後の夏。やけに雨の多い夏休み。僕は彼女に会う。くしゃくしゃの髪、大きな目、高い鼻、曲がった唇。全体として決して美人ではないが、見る者に不思議な印象を与える。死ぬ三日前のピカソが「奇妙な女性」と言う題で人物画を描いたら、恐らくこんな感じだろう。そう思わせる風貌だ。これは彼女と僕の物語。

## ハル

「普通」の定義を「特別ではない」とするならば、僕は間違いなく普通の高校生だと思っていた。

学校へ行き勉強する。予習、復習を学校で済まし、家に帰る。家では自分の好きなことをする。名作と呼ばれている映画、音楽、本をあさり、その中で、気に入った場面、一節、言葉たちを心の中にレンガのように積み上げる。そうする事で、自分が大人になれる気がする。

それが十代の特権であるかのように、本当の自分と言つものを信じ、それを探している。

未来への不安と希望。ありふれていて、誰でも抱えているはずの感情が僕にだけは何倍にも膨れ上がつてのしかかっているような気がする。

高校最後の夏。やけに雨の多い夏休み。僕は彼女に会つ。  
くしゃくしゃの髪、大きな目、高い鼻、曲がった唇。全体として決して美人ではないが、見る者に不思議な印象を与える。死ぬ三日前のピカソが「奇妙な女性」と言う題で人物画を描いたら、恐らくこんな感じだろう。そう思わせる風貌だ。

これは彼女と僕の物語。

僕の世界は、彼女と出会いことで、文字通り、色を変えてしまう。

何日ぶりに、雨があがり、代わりに太陽が顔を出した。じりじりと照りつける太陽の光が道路に出来た水溜りを奪つていった。

八月の空氣には雨と太陽の匂いが入り混じっていた。僕はそんな空氣を肌で感じながら、図書館までの道をとことこと歩いた。

その図書館は小さな役場の中についた。何の変哲も無いところが

その図書館の特徴だつた。僕はその場所が好きだつた。何時間も集中して本を読める場所というのはその他に無かつたからだ。時々訪れる表情に乏しい老人や、暇を持て余した主婦を除けば、僕は大抵一人だつた。多くの本に囲まれていると、僕は獲物を前にしたフクロウや、楽譜を前にした指揮者のように厳粛な気持ちになる事が出来た。

子供の頃から一人が好きだつた。一人が好きというより、一人でいる時間が好きだつた。他の誰でもない自分自身と多くの時間を供にしてきた。そのためか、今までに親しい友達が出来た事は無かつた。他の友達のように、ただの友達を親友と呼ぶ事が出来なかつただけかもしれない。どちらにしても、僕には心を通い合わせるような人はいなかつた。

それは家族に対しても同じだつた。大げさに聞こえるかも知れないが、僕は昔から父や母に対しても他人として付き合つてきた。血の繋がつてゐる唯一の存在。頭では分かっていても、日々の生活の中でそれを実感する事は無かつた。幼い頃はその事で随分悩んだりもしたが、今は確信している。

僕は生まれつき、孤独を望んでいるんだ。

そう考へると、人生はひどくつまらないものに思えた。皆は次々に新しい外の世界に飛び出して行くのに、僕だけはトラックをぐるぐると回つてゐる。一人長距離走みた的に。限られた世界での限られた人生。

そんな事を考へながら歩いてゐる内に、図書館に着いた。久しぶりの太陽の光とは逆に悲観的な事ばかり浮かんだ。

誰が見ても図書館の扉だと思うような扉。僕は少し深呼吸をしてから、扉を開けた。冷房の空気を感じた。汗がおもしろいように引いていった。

図書館は役場を二階に上がつたところにあつた。広さは、よくある学校のものより少し広いぐらいだつた。調べ物用のコンピュータが何台か置かれていた。子供が遊ぶためのスペースや、本をゆつく

り読むためのソファーがあつた。全体として悪くない雰囲気だつた。入り口からすぐの受付には親しみやすい空気を纏つた女性が座っていた。三五歳ぐらいだろうか。若く見せれば二十代にも見せる事が出来るだろうに、それをせず、自然のままの美しさを持っていることに好感を持つた。

僕が来た事に気付くと、彼女は嫌味にならない程度に微笑み、お辞儀をした。彼女が笑うと、まるでこれから良い事が起こりますよ、と暗示しているようなしわが目わきに数本できた。それにみどりて、お辞儀をし忘れるほどの素敵なしわだつた。

僕は彼女にもう一度、頭を下げていつもの席に座つた。冷房の空気が当たりすぎず、充分に明るいところ。入り口からは少し見つけにくい場所にあつた。その席に着くと、落ち着いた。

僕は持つてきたリュックから勉強道具を取り出した。僕はちょっと有名な私立高校に通つていたので、公立高校の生徒よりはちょっと多くの宿題が出た。おそらく先生たちは「これだけやらせたから、大丈夫だろう。」みたいな証のようなものが欲しいんだろう。

学校の授業はつまらないものだつたが、勉強という行為 자체は嫌いではなかつた。得であると言つても良かつた。知識を自分の中に積み重ね、必要のある時はそれを取り出し、活用する。その作業を反復によつて出来るだけ早く、正確にしていく。僕はその過程を時には楽しみさえした。特に勉強に時間を割いていたわけではなかつたが、成績は悪くなかった。模試での成績もまあまあだったので、来年には地方の国公立大学を受験する事になつていた。

一二時を少しまわつたぐらいだろうが、若い女人が図書館に入つてきた。

僕はその時、一日分の宿題を終え、本を読んでいたところだつた。20世紀のアメリカで出版されたもので、いくぶんか古い表現があつたが充分に楽しめた。その表現はまるで、大木に絡みつくツタのように、物語の本質を意地悪く隠していた。僕はそのツタを一本、一本丁寧にほどきながら、本の世界を進んで行つた。僕が求めたの

は結果ではなく、過程だった。重要なのはいかに正確に表現のツタをほどけるかだった。

本に集中していたせいでどうか、先程の女性が僕の傍に来ていた事にまったく気付かなかつた。

「隣に座つて良い？」と彼女は言つた。

それは僕に許可を求めているのではなく、決定事項の確認のようにな聞こえた。つまり「とりあえず聞いてあげるけど、座るのは決定しているわよ。」と言う風に。

その時、僕は驚いていたので、つい後ろを振り返つてしまつた。でも、もちろん僕以外にはいなく、「おう、隣空いてるぜ。」と手を振り返事をする本もいなかつた。そこには本を象徴する本が、氣難しい顔をして並んでいるだけだつた。

「あなたよ、あなた。」僕がきょろきょろしてからだらうか、彼女が笑いながら言つた。

「どうぞ。」と僕は言つた。ひどく緊張していく自分の声には聞こえなかつた。

彼女が僕の隣に座つた。汗の匂いがした。

「何、読んでるの？」と彼女が言つた。

僕は読みかけの本を閉じ、彼女に渡した。僕の手は少し震えていた。

彼女は面白くもなさうに、本のページをペラペラとめくついた。

この娘はいつたい誰で、何故僕に話しがけて来たのだろう、とう事で頭がいっぱいだつた。

高校生ぐらいだろうか。赤いTシャツにブルージーンズ。くしゃくしゃの髪を青い魚の形をした髪留めで止めていた。左手の人差し指には何かのおまじないのように、銀色の指輪が光つっていた。

「失礼ですけど、お会いした事はありませんよね。」僕は出来るだけ丁寧な口調で言つた。もしかしたら、僕の記憶違いでどこかで会つたことがあるかもしれないからだ。

「うん、ないわよ。」彼女が本から顔を上げて言った。「何言ってるの。あるわけないじゃない。」という風にも聞こえた。

「本、ありがとう。」と言つて彼女は僕に本を返してくれた。表情から察する限りどうも氣に入らなかつたらしい。

「ねえ。」と彼女が突然立ち上がりて言った。

「うん?」僕は彼女を見上げて言った。太陽の光を彼女の髪留めの魚がきらきらと反射させていた。それはまるで意思を持った生きた魚のように見えた。

「お腹空いてない?」と彼女は言った。彼女の台詞はまるで映画の台詞のように、無駄が無く、明確で分かりやすい。

「空いてる。」朝ご飯にコーンフレークを食べたり、何も食べていらない。

「じゃあ、じちそうするわ。」と言い彼女は笑つた。とても素敵な笑顔だつた。前に見せた笑顔よりもいくらか自然の笑顔に見えた。

「じゃあ、下で待つてるから。」と彼女は言いさつさと階段を降りていってしまった。

彼女が行つてしまつと、僕の周りの空気はその静けさを取り戻し始めた。僕はその静けさに少し息苦しさを感じた。孤独でいる静けさをそんな風に感じたのは初めてだった。僕は何かを振り払うように咳払いをしてみた。その音は不思議なほど響かなかつたが、それでも僕は少し落ち着きを取り戻した。

僕はため息をついた。数分前に出会つたばかりの女性に昼食に誘われている。年齢も名前も分からない人に。ただ一つ分かつてるのは、僕はこれから一階に降り彼女と昼食を供にするだろう、といふ事だけだった。彼女には押してはいけないボタンのような、奇妙な魅力があつた。なにより僕自身がもつと彼女と話をしてみたかった。

こんな気持ちになつたのはいつ以来だらう。客席でのんびりと見物していたのに、急にステージに上げられた気分だ。何の準備も出来ない。

やれやれと僕はため息をついた。そのため息はこれまでとは違った種類のようになに聞こえた。

階段を降りたところ、つまり役場の一階にはちょっとした休憩場所があった。大型テレビがあり、数人が座れるゆつたりとしたソファーがあり、食事を取る為にテーブルがあった。

彼女は一番隅のテーブルに座っていた。人通りがあまり無いところで、僕もその場所でよく持ってきたMDウォークマンで音楽を聞いた。彼女は階段を降りてくる僕を見つけると小さく手を振った。僕も手を振り返した。誰にも見られてないはずなのに、何故か恥ずかしかった。何やってんだ、俺。らしくないな。

僕はテーブルに座ると、頭の中で考えていた台詞を言った。

「ねえ。君はどこの誰で、何故僕に話し掛けたんだい。それだけでも教えてくれないかな。」

「話すと長くなるなあ。」と彼女は困ったように笑って言った。

「もちろん理由の方よ。名前はそんなに長くないわ。ハル、カタ力ナでハルよ。」

カタ力ナで「ハル」。その言葉の持つイメージは驚くほど、彼女にぴったりだつた。まるで「ハル」と言つて言葉の為に彼女が作られたような気さえした。

「何だか、冬眠中の熊を起こすのに使えそうな名前だな。」と僕が言つと、彼女は可笑しそうに笑つた。

「あなたの名前を教えて。」とハルが言った。

僕は自分の名前を言った。

ハルは僕の名前を大事な呪文のように、繰り返しつぶやいていた。まるでその名前が持つ形や、イメージを掴もうとしている様に見えた。

「素敵なものね。」とハルは言った。

僕は驚いた。そんな事は今まで言われた事なんてなかつたからだ。僕は自分が少し赤くなっている事に気付いた。何やってんだ、情け

ないな。

「理由の方は後にして、昼ご飯を食べましょ。私、お腹ペニペコで死にそうなの。」ハルは本当に死にそうな顔で行った。

僕は頷いた。

こりこりと良く変わったハルの表情を見ていると、人間は、目、鼻、口などの限られたパーツでいつたいいくらの表情が作り出せるんだろうと不思議に思った。

ハルは床に置いていたバスケットを持ち上げ、テーブルの上に置いた。僕は本物のバスケットというものを初めて見た。真っ白で無機的なテーブルと可愛らしいバスケットの組み合わせが奇妙に面白かった。

「サンドイッチは好き？」とハルは言った。

「好きでも嫌いでもないな。」

「じゃあ、きっと好きになる。」ハルは悪戯っぽく笑って言った。これからサンドイッチの虜になるだろう僕を笑っているのだ、と僕は思った。

彼女がバスケットを開くと、そこには正確な三角形の形をしたサンドイッチがぎつしりと並んでいた。その切り口は「絶対においしいんだろうな。」と思わせる妙な説得力があった。

「いただきます。」と僕は言ってサンドイッチをほおばった。トマトとレタスだけのシンプルなものだったが、本当においしかった。パンはふわふわで、中の具はシャキシャキとして、とても新鮮である事が分かつた。バターの風味もアクセントになつていて、飽きない味だつた。何より、余計なものが何も入っていないのが良かつた。

「おいしいな。ちょっと驚いたよ。」と僕は言った。実際はちょっとではなく、大分驚いていた。コンビのサンドイッチとは大違いだつた。

「でしょ。」とハルは笑つて、サンドイッチを手に取つて上品に一口食べた。

その仕草でハルは僕の何倍もサンドイッチを食べてきたんだろう

な、と僕は思った。それはピアーストがピアノを前に呼吸をする時のような一種の老練さまで僕に感じさせた。たかがサンドイッチじゃないかと思うかもしだれだけど、それぐらいおいしいサンドイッチだつた。

食事の間、僕達はほとんど口を開かなかつた。あるものに對しては。ある態度が求められるように、僕達は静かにサンドイッチに向かい合つていた。サンドイッチの中のレタスやキュウリを食べる時のポリポリという音だけが役場の一階に響いていた。

「コーヒーを飲まない？」とハルが言つた。食事が一段落した時だつた。僕は頷いた。

「本当は挽き立てが良いんだけど。」ハルは申し訳なさそうに言いながら、水筒の中にいれてあるコーヒーを僕に入れてくれた。とても香ばしいコーヒーだった。嫌な苦味ではなく、一口飲むたびに、すっきりとした香りが口の中に広がつた。

まるで初めてコーヒーを飲んだかのように、コーヒーを見つめている僕を見て、ハルは

「物事にはやり方つていうのがあるの。それはサンドイッチもコーヒーも同じよ。」と言つた。

「同感だな。でも初対面の異性を誘つのにもそれなりのやり方つてものがあると思うけどな。」と僕は言つた。

「ごめんなさい。私、こういうのに慣れてなくつて。」ハルは恥ずかしそうに言つた。

「いや、良いんだ。その誘いに乗つた僕も僕だしね。その楽しかつたし。でも、そろそろ教えてくれないかな。ハルが僕に話しかけた理由を。」

ハルは真っ直ぐに僕の目を見た。僕が話す価値のある人間なのかを見極めているようだつた。

ハルの瞳は単純な黒や茶色ではなく、もつと色々な色が混じつた複雑な色だつた。しかし、それは人を惑わせる複雑さではなく、「一体どうなつているんだ」と思うほど、不思議で綺麗な色だつた。

ひどく長い沈黙だった。その間ずっと、ハルは僕の目を見つめていた。不思議と僕はハルの瞳から目を離せなくなっていた。

ハルは話すかどうかを迷っているというよりは、どうすれば一番自分の伝えたい事が伝わるかを考えているように見えた。

ハルは決心したように瞬きをして言った。

「お願いがあつたの」とハルは言った。

「お願い?」僕は聞き返した。

「そうよ、私を殺して欲しいの。」

「私と付き合って欲しいの。」そんな答えを期待していた僕は、驚いて言葉が出なかつた。いや、その時は驚いてすらなく、冗談だと思い込もうとしていた。しかし、ハルの瞳がそうでない事を示していた。

瞬きをした瞬間に、ハルの瞳は色を変えてしまったようだつた。纖細で微妙な色合いが失せ、代わりに淡い黒が瞳の大部分を占めていた。瞳の奥では周りの黒とは違う質の黒色がかすかに震えていた。触れるだけで傷つきそうな、小さな森の小さな動物のように。僕はそれを見た途端、激しい寂寥感に襲われた。胸がつまり、息ができない。息ができず、言葉が出ない。

それでも僕は目をそらす事が出来なかつた。そらしたくなかった。

「ありがとう。」小さな子供に言うように、ハルは言った。

「もう、良いのよ。」ハルは首を振つた。

僕はコーヒーの水面に目を落とした。

何かを言わなきやならない、そう思つたが、言葉は何も出てこなかつた。のどを湿らすために、コーヒーを口に含んだ。それはもう冷めていて、おいしくなかつた。僕達が見つめ合つている間に、誰かが「コーヒーを取り替えたのかもしれない。

「どうということかな。」思いがけず、感情を殺した声になつた。

ハルは答えなかつた。瞳の色は元に戻つていた。いや、最初から変わつてなどいなく、僕がそう感じただけの事かもしれない。

ハルは「一ヒーを一口飲み

「私というのは正確じゃないわ、もう一人の私を殺して欲しいって言った方が良いかしら。」と言つた。

「もう一人のハル。」

そう、という風にハルは小さく頷いた。

「私はある出来事をきっかけにして、二人に分裂してしまった、だからここにいるのはもう一人の私。不完全な私。」

ハルは両腕で自分の体を抱きしめていた。まるで自分が消えそうになるのを必死で止めていたように見えた。

僕がハルを抱きしめる事が出来たらどんなに良いだろう、と僕は思つた。でも、それは出来ない。僕は彼女の事を全然知らない。

「その話を聞かせて欲しい。」

僕はハルの目をまっすぐ見つめて言つた。今度は絶対に目を離さない。

「君の事が知りたいんだ。」

ハルは諦めたかのように、また、嬉しそうに、淡く笑つた。

「これはとても非現実的な話なの。」ハルは非、というところを強調した。

「構わないよ。」と僕は言つた。昼食に来た時点である種の覚悟は出来ていた。どうやら、僕はボタンを押してしまったらしい。

「随分前になる。」

ハルは重い口を開き始めた。

それはハルの言つとうり、控えめに言つて、ものすごく非現実的な話だつた。

ハルは裕福な家庭に生まれた。父は建設会社の社長で、母は専業主婦だつた。一人っ子だったので物には不自由しなかつた。甘やかされたというわけではなく、必要なものは与えられたという感じだ。それを求める適当な理由があり、ハルが本当にそれを必要としていた場合には与えられた、練習用のピアノだつたり、一緒に遊べる犬

だつたりだ。

裕福な家庭に生まれた一人っ子と言つと、わがままで自分勝手なイメージがあるかもしれないが、ハルは違つた。むしろその正反対だつた。眞面目で責任感が強く、人の気持ちを知る事が出来た。それに明るく、勉強も良く出来たので、友達は多かつた。小学校では決まって学級委員に選ばれた。ハルの友達は相談事があれば、すぐにハルに相談した。ハルはどんなにくだらない事でも相談に乗り、自分の出来る限りのアドバイスをした。

当然の事だが、先生もハルの事を信頼しており、いつもクラスの中心人物だつた。

ハルはいつからか、自分の言つ通りに友達が行動するのを見て、楽しむようになつていた。社長である父親の影響なのだろうか。人の上に立ち、人に命令する事にハルはなれていた。

ハルはちょっととしたイタズラをするようになつた。

キャッチボールをしている時、ボールをわざと相手と違う方向に投げたり、相手の質問に明らかに嘘をついたりした。そんなイタズラに相手が気付いていないのを知り、喜んだ。

ある意味でハルは歪み始めていた。でも、その歪みには誰も気付かなかつた。友達、先生、両親、そして自分自身でさえも。

ハルが小学三年生になつた時、一人の少女が転校してきた。

名前を早紀と言つた。艶やかで、黒く、長い髪。宝石のように輝く瞳。鼻はスラッと高く、唇は今出来たばかりのように鮮やかに色づいていた。比喩でも表現でもなく、本当に天使のような少女だつた。

早紀を見た者は誰でも、すぐに彼女を好きになつた。ハルもその例外ではなかつた。

転校初日の放課後、ハルは早紀に声をかけた。早紀は毎休み時間、みんなからの質問攻めにあつて少し疲れているようだつた。でも、それで分かつた事もあつた。

何らかの事情があつて、有名私立小学校から転校してきたという

こと。何らかの事情があつて、今は両親ではなく親戚の人と一緒に暮らしているということ。さすがにその何らかの事情というのは教えてくれなかつた。

「ねえ、今日、私の家に遊びに来ない。」とハルは言つた。

早紀は初め、戸惑つたような困つた顔をしていたが、

「今日は両親どちらともいないから、一人だけでいっぴ遊べるよ。」とハルがイタズラっぽく笑つて見せると

「うん、じゃあ、行くわ。」と笑顔で返事をした。まるで「私は世界中の人に愛しているわ。」という風な笑顔だつた。彼女の笑顔にかかるば何だつてとろけてしまうだらう、ハルは本氣でそんな事を思つた。

その日以来、二人は親友になつた。

一緒に好きな音楽を聞いたり、一緒に買い物をしたりした。そしてそれ以上に一人で色々な事を話した。ハルの家にある、ソファーに一人で並んで座り、自分達の世界を享有した。

早紀と一緒にいる時間が増えるほど、ハルは早紀に惹かれていつた。その代わり、他の友達とはあまり遊ばないようになつていつた。

早紀はハルにないものを持っていた。豊かな感受性、独創的な視点、そして早紀はそれらを自分の言葉で表現する事が出来た。そして何より、早紀は美しかつた。早紀のちょっととした動作にハルは完成された大人の魅力を感じた。ハルはどちらかというと、子供らしく、可愛い方だつたので、早紀にますます憧れるようになつた。

早紀に軽蔑されたくない一心で、友達にイタズラするのをやめた。自分が早紀の親友として恥ずかしくないようにしよう、とハルは思つた。

でも、時折、早紀はハルがぞつとするほどの表情を見せた。

二人だけで買い物に行つた時だつた。ハルは気に入つた服を買つ事ができて上機嫌だつたが、反対に早紀はいつもより無口だつた。

「どうしたの。」とハルが聞いても

「何でもない。」と答えるばかりだった。

そういう時もあるよね、とハルが思いながら、歩いていると急に雨が降つて来た。まるで何かを慰めるように降る静かな雨だつた。ハルはすぐに店の下に雨宿りをしに行つたが、早紀は道路の真ん中に突つ立つていた。

黒く、長い髪が水を帶びて、キラキラと光つてゐた。まるで早紀が雨を操つてゐるようにも見えた。

「何やつてるの、早紀ちゃん、風邪ひいちゃうよ。」とハルが言つても、早紀はある一点をじつと見つめていた。

その視線は店と店との間の路地に注がれていた。ハルはその部分を注意して見てみると、薄汚れたダンボールがあつた。早紀はそのダンボールの方に近づいて行つた。ハルもそれに倣つた。ダンボールの中には二匹の子犬が入つてゐた。生まれたばかりなのだろうか、その二匹はまるで競い合つみた的に私達に尻尾を振つて見せた。子供が親に言われて捨てに來たのだろう。ダンボールの側面には「飼つてやつて下さい。」と拙い字で書いてあつた。

「ねえ、ハルの家では犬飼えないのかな。」と早紀が言つた。

ハルは意外に思つた。どちらかと言つと、捨て犬を見て家に連れて帰ろうとするのは自分のタイプだらう、と思つたからだつた。早紀は「じゃあ、交番に届けて、飼い犬を探してもらいましょう。」とか言つうと思つてゐた。

「ねえ、ハル、あなたどっちが良い?」と早紀が言つた。

「えー、私はどっちでも良いよ。」意外に早紀も子供っぽいかもしないな、とハルは思つた。もう、飼つたつもりでいて、自分の犬を決めようとしているのだ。

「とりあえず、持つて帰りろうよ。ママに相談してみる。」とハルが言いダンボールを持ち上げようとすると、早紀が

「駄目よ。」と言つて止めた。

「早紀ちゃん?」ハルが不思議そうに早紀を見ていると

「連れて帰るのは一匹だけよ。」と早紀が言った。

「え、どうして。」

「そっちの方が面白いじゃない。」と早紀は何でもないよう言つた。

つた。

その時の顔をハルは一生忘れないだろう。雨に濡れた髪が額に張り付き、それさえもが早紀の顔を彩っていた。でもその顔に浮かんでいるのはいつも天使の微笑ではなく、悪魔のよう冷血な笑みだつた。

早紀は子犬の命と引換えにして、自分の楽しみを得ようとしているのだ。

結局はハルが早紀を振り切るようにして、一匹とも連れて帰つた。それからというのも、何となく、ハルと早紀は一緒に遊ばないようになつていつた。ハルは前のように色々な友達と遊ぶようになつたが、早紀の方は一人でいる事の方が多いみたいだった。

そしてある事件が始まつた。

夜、ハルが自分の部屋で本を読んでいると、電話が掛かつてきました。

「早紀ちゃんからよ。」と母は言つた。

なんだろう、とハルは思つた。あの時以来、ハルは早紀とまともに話したことはなかつた。それに言いたい事があるなら、学校で話しかけてくれれば良い。

「この町つて空気は良いよね。」と早紀が言つた。

「うん、そうだね。」とハルは言った。何故か背中に悪寒が走つた。何かが後ろにいるみたいな気がして、ハルは後ろを振り返つたが誰もいなかつた。いつも通りの私の部屋だ。

「私が前に住んでた所はもっと空気がまずかつた。それにこんなに森とかもなかつたしね。」早紀は何かを楽しんでいる風だつた。

「そうだね。」とハルは言いながらも、薄気味悪いものを感じた。早紀がどんな顔をして電話の向こうにいるのかが分からなかつたからだ。

「ねえ、かくれんぼしない?」と早紀が言い、小さく笑った。

「かくれんぼ。こんな時間に?」ハルは訳がわからなかつた。あの時の早紀の顔が脳裏に浮かんでは消えた。自分の部屋から外を覗きこんだ。暗闇がいつもより暗く、風は重かつた。

「今から学校に来てよ。いつもの教室で待つてるから。」と早紀が言つて。ガシャンと電話が切れた。耳が痛くなるような切れ方だつた。

どうしようか、とハルは思つた。何らかの理由をつければ、家を出る事も可能だろう。でも、早紀が学校にいるとは限らない。家から電話をかけて私の反応を楽しんでいるだけかもしれない。

でも、ハルは、学校に忘れ物したからと母に言つて家を出た。なんだか嫌な予感がしてた。私が行かない、誰かが傷付くかもしれない、という漠然とした不安があつた。

学校までの道のりの中、ハルは自分の体が消え入りそうになるのを感じていた。体が震え、心臓の鼓動がやけに大きく聞こえた。知らず知らずうちに早足になつていた。

でも、そんな震えや鼓動は、学校に着くと嘘みたいにピタリと止んでしまつた。夜の学校は昼の学校より、生き生きとしているように見えた。耳を澄ますと、校舎の息遣い今までが聞こうそうな気がした。校舎の扉は開いていた。三年一組の教室には明かりはついていた。安心した気持ちと供に、何故か落胆している気持ちもあつた。ハルが校門に向かつて歩き出そと振り返ると、そこには早紀が立つっていた。

ハルは不思議に驚かなかつた。そうじやなきや、みたいな気持ちもあつた。家を出た瞬間から何があるだろ、と感じていた。

早紀の髪の毛が黒いせいでどうか、早紀の体はほとんど暗闇と同化しているように見えた。雨降りの時もそうだつた。早紀は何とでも同化できるのかもしれない、とハルは思つた。

「かくれんぼだつたよね。」早紀が言つた。早紀はもう自分の声

を飾つたりはしていなかつた。自分の本当の声で喋つていて。それは例えるなら、人間の声を何倍にも凝縮させたような声だつた。不自然に大きく、聞き取りづらかつた。

「良いわよ。」とハルは言つた。自分の声を震えなにようにするだけで、精一杯だつた。

「そう、じやあ貴方に鬼をやつてもらうわ。」と

「それで貴方が隠れるの？」早紀ちゃんと呼びそうになつて、あわてて貴方に変えた。

「いや、隠れるのは私じゃないわ。この子よ。」と言つて早紀はハルに携帯電話を投げて寄越した。

携帯電話からは誰かの声が聞こえた。ハルが携帯電話に耳を当てると、

「もしもし、早紀ちゃん。もう助けて。お願ひだから。私、ホントに何でもするからや。」という声が聞こえた。ほとんど泣き叫ぶような声だつた。声に聞き覚えはなかつた。

「何これ。」とハルは言つたが、ほとんど声は出でていなかつた。

「あなたの知らない、私の友達よ。」と早紀は言つた。

「そうじやなくて。」ハルは出来る限りの大聲で言つた。でもその声は闇に吸い込まれてしまつた。もしかしたら、闇は早紀の味方なのかもしれない。

「これ、どういうことよ。」とハルは言つた。

「だから、かくれんぼよ。貴方はこの声の主を探すのよ。大丈夫。すぐに捕まるわ。動けないようにしてあるから。」と言つと、早紀はハルの手から携帯電話をぶん取つた。

「警察に連絡したら困るからね。」と早紀は言つた。

警察、と聞いた瞬間、ハルの頭にある考えが浮かんだ。家に帰れば、電話だつてあるし、両親だつている。

ハルは家に急ごうとしたが、体が動かなかつた。

「あれ、動かない。」動かせないといつよりは、体が、脳が、そして自分自身が動こうとしていなかつた。

「やつぱり、体は正直ね。」と早紀は言った。

「どういうことよ。」とハルは早紀の目を見つめながら言った。

その時、ハルの心が不意に暖かくなつた。まるで昔使つていた物を眺めた時のような気持ちだつた。

「だつて。貴方と私は一心同体だもの。」と早紀は言った。

ハルの啞然としている顔が面白かつたのか、早紀は大声で笑い始めた。その声はハルの頭の中に入つてきて何かを搔き乱した。笑い声が夜に響いた。校舎もそれに呼応してガサガサと唸つた。

「貴方が彼女を見つければ言おうかと思っていたんだけど。もう今でも良いかな。」と早紀が言った。トリックのネタを発表するマジシャンのように、得意げな顔になつていた。

「私は貴方から生まれたの。」と早紀は言った。

ハルは何も言つことが出来なかつた、驚いたからではない。その思いが、最初に早紀を見た時から心の片隅にあつたからだ。もちろん容姿も、正確も、全く違う。でも、一緒にいるとふとそういう思いに駆られることがあつた。

「貴方のマイナスの部分から、私は生まれたの。だから、私が許さなければ、貴方は動く事も出来ないわ。今や、私のほうが本休みたいなものだからね。」と早紀は言った。早紀の言つてることは本当だと、ハルは本能で分かっていた。

「どうすれば良いの?」とハルは言った。

「あの子は森の中にいるわ。そういう意味では、ここには森が一杯あつて助かつたわ。」

ハルは頭の中でここら辺の森の場所を必死に思い出そうとしていた。

「一つだけ言つとくけど。これはゲームだから。貴方が勝つたら、私は消えるけど、私が勝つたら、貴方には消えてもらうわ。良いでしょ。タイムリミットは夜明けまでよ。」と早紀は言った。

「良いわ。」とハルは言い、校門を出ていった。

そうしてかくれんぼが始まつた。

ふと、それを見上げると夜が一段と低くなっていた。月がいつも  
の無表情な顔でハルを睨んでいた。息が上がり、足が回らなくなつ  
てきた。どれくらい走つていただろう。ハルはついに歩き出してし  
まつた。

早紀は「あの子」は森にいる、と言つたがこの辺には森なんてい  
くらでもある。どうしようつ、と考えているハルにある考えが浮かん  
だ。早紀は私と一心同体。なら、私が絶対に見つけられないと思う  
森の場所は・・・・・。

ハルは走り出した。子供の頃、自分自身がよくかくれんぼに使つ  
た場所だ。奥まった場所にあり、そこに隠れれば絶対に見つからな  
かつた。でも、よく迷子になつてママに怒られたつけ。ママの事を  
思い出すと、不意に涙がこぼれそうになつた。自分はおもつたより、  
弱つている、とハルは感じた。

急がなきや、と走る足に力を込めた。

森の入り口に立つと、体が強張つてくるのをハルは感じた。子供  
の頃は感じなかつた種類の恐怖がハルを襲つた。子供の頃は無邪氣  
だつたから、この恐怖を感じなかつたのだろう、とハルは思った。  
でも今は違う。この森は私を受け入れてはくれない。

一つ深く深呼吸をしてから、森の中にゅっくりと入つていった。  
森の中にはうつすらと歩道のようなものがあつた。故意に作られ  
たものではなく、子供がよく通るので、自然と出来たものだろう。  
森はひつそりとしていた。何の音も聞こえてこなかつた。でも、  
ハルは分かつていた。これは森の仮の姿だ、という事に。森全体が  
「静寂」という題でオーケストラでも弾いているのだろう、と思わ  
せるほど、不自然に静かだつた。私がちょっとでも、不快な音でも  
させば、すぐに飲み込まれてしまうだろう。

今までかいだ事の無い汗をかいいていた。出来る事なら、しゃがみ  
込んでしまいたい、とハルは思った。目を閉じ、耳を塞ぎ、太陽が  
この世界を照らすまで、じつとしていたいと思つた。

実際にハルは膝をついていた。風が吹きざわざわと森が鳴いた。

森がだんだんと自分に迫つてくるような気がした。いや、気のせいじゃない、確かに森は近づいている。その時、風に乗つて「あの子」の声が聞こえたように感じた。

ハルは弾かれた様に、立ちあがり、そのけの方向に急いだ。道から外れたためか、木の枝が顔に当たり、痛かった。無我夢中で走り抜けると、少し開かれた場所に出た。そこには足から血を流している少女がいた。

「大丈夫。」と言いハルは少女に駆け寄つた。

「いや。」と少女は言い、ハルを押しのけようとした。ハルと同年代か少し下ぐらいの少女だった。

「大丈夫、私はあなたを助けに来たの。」とハルが言い、少女を強く抱きしめると、少女はやっと安心したようだつた。

しばらくの間、ハルは少女を抱きしめつづけていた。心なしか、森も私達を包み込んでくれている気がした。先程までの恐怖は消え、母に抱きしめられているかのような安堵感が胸の中に広がつた。

「森には気を付けなければいけないぞ。よく表情を変えるからな。そのい表情の変化を見逃してはいけない。」ハルが初めてこの森で迷子になつた時、ハルの父が言つた台詞だ。

その言葉を思い出すと、なぜがハルの目から涙がこぼれた。ハルは涙を拭わなかつた。拭くのがもつたいないと思つたからだつた。少女はいつのまにかハルの胸の中で眠りについていた。

もう大丈夫だ。とハルは思つた。このまま朝になるのを待つて、大人を呼びに行けば良い。夜の森を一人だけで歩き回るのは危険過ぎる。少女を寝かせ、何気なくハルが立ちあがると、そこに早紀がいた。

早紀は疲れ切つたような顔をしていた。体が重いらしく、木の寄りかかっていた。

「貴方の勝ちね。」と早紀が言つた。悔しがつてゐるよつには見えなかつた。

ハルは黙っていた。

「でも、最後の仕上げが残っているわ。」と早紀が言い、ハルに何かを投げて寄越した。

それは鈍く光を放つナイフだった。

ハルは驚いて早紀を見た。

「それで、私を殺すの。それで、全部元通りになるわ。大丈夫、殺人犯にはならないわ。それは貴方にも分かるでしょう。」と早紀は言った。

その事はハルにも分かっていた。これは早紀を殺すのではなく、私が一人に戻るために儀式のようなものだ。それは分かっていたが・

「出来ない。」とハルは言った。彼女を生み出したのは私の弱い心だ。それをまた自分の都合で消すなんて出来ない、とハルは思つた。

「分かつたわ。」と早紀が言った。

「貴方は怖いのよ。また元の一人に戻るのが。弱い心を押さえつける自信がないんでしょ。だから、私に弱い部分を押し付けようとしている。」

「違う。」とハルは叫ぶようにして言った。でも何が違うのかは、ハルには説明できなかつた。

早紀はあきれたように、ため息をついた。

「良いわ。貴方がそうしたいならね。でもいつか必ず後悔するわ。その時はこの森に来なさい。私の命を奪いにね。」と早紀は言い。森の闇の中に消えていった。

ハルが早紀の消える瞬間を目にしたと思うと、急に意識が抜けていった。

目が覚めた時、ハルは病院のベッドの上いた。それからの事はハル自身あまり、良く覚えていなかつた。どうやら、子供同士のかくれんぼの延長線上の事件だと思われていたようだつた。

ハルも両親からとても、怒られたが、不思議と何も感じなかつた。くるくると良く回る両親の口をぼうと見つめていた。

警察は早紀を懸命に捜したらしが、結局見つからなかつた。

そうして時が流れた。

「その後の私は何も感じなくなつたわ。全くの無感覚になつたの。」とハルは言った。

辺りは静かだつた。まるで世界中がハルの話を聞いているんじやないか、と思うほどだつた。バスケットの中でいくつかのサンドイッチが寂しそうに並んでいた。

「無感覚つて？」と僕は聞いた。少なくとも、僕が見た限りでは、ハルは笑つたり、怒つたりしていた。

「何も感じなくなつたつて事。」ハルは簡潔で分かりやすく言った。

「何も感じない？味覚も、触覚も？」と僕は聞いた。本当に何も感じないのであれば、それは精神的なものではなく、もはや病氣じやないのか。

「うーんと、どう言つたら良いかしら。」とハルは言い、サンドイッチを一つ、手に取つた。

「例えば、このサンドイッチを食べるとするでしょ。」とハルは言い、実際、一口かじつてを見せた。

「あなたはこのサンドイッチを食べた時、どう感じた？」

「えつと、普通に美味しいなど感じたな、上手くは言えないけどね。」

「普通はそうよね。でも私は違うの。極端に言えば、このサンドイッチは美味しいんだろうなって思うだけなの。」

何だか難しくて良く分からなつて思うだけなのが、脳がそう判断するだけで、味覚は本当には機能していなつて事か。

「それほどどんな事にも当てはまるの？」と僕は聞いた。

「うん、まあ、大体そつなるわね。」ハルは何てことは無い、と

いう風に言った。

だとすれば、と僕は思った。ハルはその事件以来、ずっと仮面を被つて生きてきたというのか。何も可笑しくなくても、友達が笑っている時には笑い、友達が泣いている時には泣いてきたのか。僕に見せた笑顔も作ったものなのか。そう思うと僕はたまらなく悲しくなった。

ハルが「自分は不完全な人間だ。」と言った理由が初めて分かつ気がした。ハルにとつてこの世界は不完全以外の何ものでもないのだろう。

「ねえ、そんな悲しい顔しないでよ。」とハルが言った。ハルも泣き出しそうな顔をしていた。いや、泣き出しそうな顔を作つていると言つた方が良いだろうか。

「「じめん。」と僕は言った。

「でも、君はそんな風にしてずっと生きてきたの？それは辛くなかった？」と僕は続けた。

「辛いという感情も私には無いもの。両親は私を何回も病院に入れたけど、全然治らなかつたわ。当たり前よね、全ての原因は早紀、いや、私にあるんだもん。」とハルはいつた。

「周りの人達は何かしてくれなかつたの？」と僕は聞いた。ハル昔から仮面をつけていたわけではないだろう。

「初め、周りの人達は私を心配してくれたわ。でも、それはだんだん恐怖に変わつていつた。皆得体の知れない者を見るような目で私を見るんだもの。私はその顔を見るのが嫌だつたわ。理屈じゃないの、その顔を見ると気持ち悪くなつた。だから、私は普通の人間の振りをする事にした。周りの人達の真似をすれば簡単だつたわ。それで両親も安心してくれた。」ハルは一気に喋つた。そんなハルの顔には何も浮かんでいなかつた。普通の人間に對する、怒りも、悲しみも。感じるとすれば、いくらかの諦観だけだった。

「なんだ。」と僕は言った。僕がハルに懸けてあげられる言葉は何もなかつた。少なくともハルは慰めの言葉なんて必要として

いなかつた。

「それで、僕は何をすれば良いの。」と僕は言った。

ハルが僕の目を見つめた。

ハルの瞳はその複雑な輝きを失つていなかつた。僕はその瞳に引き込まれそうになつた。ハルの人間味が唯一残つているとすれば、それは瞳だつた。その瞳はハル以上に何かを切実に求めていた。僕はそれを素直に受け止める事が出来た。

「手伝ってくれるの？」とハルが言った。

「うん。」と僕は言つた。ハルが求めているのは、無責任な慰めの言葉ではなく、曲がらない意思であり、迅速な行動力だ。

「何で？」とハルが聞いた。

「何で、初対面の私の話を信じてくれて、それに手伝ってさえくれるの？」ハルは本気で不思議がつていて見えた。

「君が好きだからだよ。」と僕は言つた。自分の顔が赤くなつていくのを感じた。何を言つてるんだ、俺は。ドラマじやあるまいし。「こんな事言つても、ピンと来ないかも知れないけど。好きになつちゃつたんだ。」

「そう、ありがとう。嬉しいわ。」とハルは言つて笑つた。心の底から笑つてゐるようだ。僕の目には映つた。

「じゃあ、明日の昼一時に、ここに来てくれる。」とハルは言い、僕に簡単な地図を渡した。地図には駅の住所と、その駅までの道のりが書いてあつた。

「駅、そこからどこに行くの？」と僕は聞いた。

「もう一人の私がいる森よ。私は引っ越し始めたから。あの町まで戻らないと。」

「そう、じゃあ。明日はよろしく。」と僕は言つた。

「こちらこそ。」とハルは言い、帰り支度をはじめた。

「必要なものは私が持つてくるから、君は手ぶらで良いからね。」

と言い、役場の出口に向かつてハルは歩き出した。

僕は遠ざかるハルの背中をじっと見つめていたが、ふと疑問に思

つた事を背中に投げかけてみた。

「ねえ、どうして、ハルは僕に話しかけたの。」

ハルがこちらを振り返り、少し迷つてから

「君の読んでいた本。私が昔、感動した本なの。」と言つて、出て行つた。

本か、と一人でつぶやき、その本の表紙をなでた。

やれやれ、と僕はため息をついた。なんだか面白くなってきたじやないか。

登山用のリュックに必要な物を詰めて、家を出た。家族には友達と旅行に行く、と言つておいた。いつ帰つてくるかは分からない、とも。

ハルが書いてくれた地図に従つて、駅まで歩いた。太陽の光が首筋を焼いていた。耳を澄ますと、ジリジリと太陽が地面を焼く音が聞こえそうな気がした。途中でコンビニに入り、昼食を買った。サンドイッチを買おうとしたが、やめた。あのサンドイッチよりは美味しくないだろう。

すれ違う人々は皆、笑つたり、怒つたり、友達と喋つたり、犬とじゃれ合つたりしていた。無表情の人間といつもは一人もいなかつた。みんな、それなりにこの世界を楽しんでいるようだつた。

駅に着くと、ホームのベンチに座つて、昼食を食べた。何て事のない弁当だつたが、それなりに美味しかつた。時計を見ると一時前だつた。辺りを見まわしてもハルの姿は無かつた。ハルの性格からして、時間に遅れるというのは考えられなかつた。

まあ、後数分あるしな、と思い僕は本を開いた。昨日、図書館から借りてきた本で、ハルが僕に話しかけるきっかけとなつた本だ。

本の題名は「コーヒーを飲まないか?」。不眠症に陥つた男があらゆる種類の幻覚を見る話しだ。その幻覚の中、男はこの人生の犯罪を経験する。殺人、窃盗、麻薬、強姦、その他のあらゆる犯罪だ。結局、この男には何の救いをもたらされない。精神的な意味でも、

肉体的な意味でも。

読んでいる本に影が落ちた。顔を上げるとハルが立っていた。時計を見ると一時ちょうどだった。

「時間ぴったりだね。」と僕が言つと、ハルは黙つて笑い、僕の隣に座つた。

「ねえ、電車はいつ来るの?」と僕が聞くと

「まだ来ないわよ。」とハルは悪戯っぽく笑つて見せた。

「君と話したかったから。」と付け加えた。

僕は赤くなつた。僕はすぐに赤くなつてしまふのだ。これはもはや、性格の問題ではなく、体質の問題だと自分は思つている。

「その本、面白い?」とハルが言つた。

「全然。」と僕は答えた。

「だよね。」

「うん。」

会話終了を告げるかのように、ハルは持つてきた帽子を被つた。アメリカの子供が被るような帽子だったが、ハルには良く似合つていた。くしゃくしゃの髪は後ろで一本に止められていた。指輪の形をした髪留めで太陽の光が当たる度にキラキラと光つた。それと似たタイプの指輪もしていた。

僕がハルの顔を見詰めていたからだろうか、ハルが

「何を見るの?」と言つた。

「別に。」と僕は言つた。

はあ、とわざとらしく、ハルがため息をついた。

「そういう時は『君を見ていたんだ』ぐらい、言わないと。」

「普通は言わないと思うよ。そんな事。」

「そうかしら、私の友達は良く言われるつて言つてたけど。」

何の変哲も無い会話が今の僕には、新鮮で、楽しかつた。ハルの言葉には表情がない。そこには嘘さえも潜り込む余地はないのだ。何気ない会話なんて、今まで僕はした事が無かつた。いつもそこには、「これ以上踏み込まれないように。」する自分がいた。そのせ

いか、いつも友達は離れていた。そして親しく会話を交わす友達が出来ないまま、今まで生きてきたのだ。

その点では、ハルと似ているかもしれない、と僕は思った。ハルは今まで「普通の人」の仮面を付けて生きてきたのだ。親友がいたとしても、ハルは「親友」の振りをしていたに過ぎない。

そう思ふと、横で髪の毛をいじっているハルがたまらなくいとおしくなった。

僕はハルの手にそつと自分の手のひらを置いた。ハルは重なった僕の手を見た後、ゆっくりと僕の顔に視線を向けた。ハルの瞳は、複雑な模様を絶え間無くその水面に映していた。

ハルは何も無かつたように前を向いた。僕も赤くなつた自分の顔を見られたくないからだったので、前を向いた。手は重ねられたままだつた。

ハルの手は暖かかった。どんなに顔に表情がなかろうと、どんなに言葉に感情が込められてなかろうと、どれほど何も感じないとしても、ハルの手には血が流れていった。僕はその血の流れを感じることができた。

「ハルの手は暖かいね。」と僕は言った。

「そうかしら、普通だと思うけど。」

「うん、普通だよ。まるで『普通の人』みたいだ。」

僕がそう言うと、ハルはにっこりと笑顔を作ってくれた。それは周りの大人を安心させる為のものでもなければ、親友の振りをする為のものでもなかつた。その笑顔は他の誰でもない、僕だけに向けられたものだつた、たとえ、その笑顔が作られたものだとしても、心の底からのものではないとしても、僕は嬉しかつた。

「ありがとう。」と僕が言うと、ハルは小さく頷いた。

手を重ね合つたまま、僕達は黙つていた。沈黙は僕にとつても、おそらくハルにとつても、心地良いものだつた。こんな種類の沈黙もあるんだ、と僕は思った。たぶん、僕らは、表面上、いくら他人と言葉を交わしていたにせよ、心の中では沈黙をしていたんだと思

つた。その沈黙は僕達をどこにも連れていかなかつた。たゞ、自分の中に深く、狭く、沈んでいくだけだつた。

肩に手を置かれて、見上げるとハルが立つていた。何時の間にか僕は目を瞑つていたらしい。太陽の光のせいか、ハルの顔が見えなかつた。

「電車、來たよ。」とハルが言つた。

うん、と僕は言い、電車に乗り込んだ。電車の中は思つたより混んでいた。海に行くのだろう、若い男女や、昼から出勤するのだろう、サラリーマン、色々な人がいた。でも、座れる程度だったので、僕とハルは微妙に離れて座つた。

電車に揺られながら、僕達は黙つていた。僕は図書館で借りてきた本を読み、ハルは流れる風景を見ていた。他の乗車客の話し声はなぜか聞き取りづらかつた。まるで、僕達と彼らでは、住む世界が違うようだつた。

僕は目を閉じて、彼らの生活を想像した。若い男女は海で遊ぶのだろう。海を泳ぎ、肌を焼き、海の家でやきそばでも食べるのだろう。その後、一夜の愛なんかを語り合うのかもしれない。サラリーマンは上司から呼び出されたのだろうか。これから、書類かなんかを整理するのかもしれない。もしかしたら、深夜まで残業するのもしれない。

そんな事を僕は取り止めも無く、延々と考えていた。いつしか、僕は彼らの世界に入りこもうとしていた。そこには僕が、もしくは、ハルが失つてしまつた色々なものがあつた。気楽な笑み、「冗談の怒り、親密な感情。周りの空気がねつとりとしたものに変わつていつた。僕が望むなら彼らの世界に入り得たかもしれない。でも、僕は怖かつた。失つてきたものと一人で対面する事が怖かつた。

僕は目を開いた。周りの空気は元に戻つていた。僕は汗をかいていた。不快じゃないけど、妙に体の感覚に残る汗だつた。

「大丈夫?」ハルが心配そうにこちらを見ていた。

「何でも無いよ。大丈夫。」と僕は言つた。でも、僕はハルとは

違う。僕の顔は「大丈夫じゃない」とうことをはつきりと示していただろう。ハルがまだこちらを見ていたので、それを振り払うように、僕は流れる風景に目を遣った。

外に広がる風景はほとんど僕の目に止まらなかつた。幾何学的に並んだ家、こじんまりと広がる森、小さな田んぼ。それらの風景は何の、歴史的、また地域的特色をあらわしていなかつた。そのまま切り取つたら、「電車の中から見える風景」として美術館に飾れそつな程だつた。

僕は窓に映つてゐる自分の顔を見ていた。自分の顔をじつと見つめるというのは奇妙な行為だつた。見慣れてゐるはずなのに、じつと見ていると、これは自分の顔じやないという思いがだんだんと強くなつていつた。窓ガラスに映る自分の顔が溶けだし、誰か別の顔になるのではないかという思いもあつた。僕は後ろを振り向いてみたが、そこには誰もいなかつた。

僕は首を振つた。これから起ころうだらう事を思い、いくらか緊張していたのかもしぬれない。僕はまた、本を開き、僕達がいる世界でも、彼ががいる世界でもなく、不眠症の男がいる世界に入つていつた。その世界では誰も救いなど求めていなかつた。

電車が駅に着き、何人かの人気が降り、何人かの人気が乗り込んだ。どつちにしても、見分けがつかないような顔をした人々だつた。

「後どれくらいなの?」と僕は聞いた。何でも良いから、ハルと話していきたい気分だつた。

「うん、もうちょっととかな。」とハルが言い、外に目を向けた。僕もハルと同じ様に外に目を向けたが、特別変わつた所はなさそうだつた。ハルの目には、感慨のようなものは一切映つていなかつた。

「どれくらいこっちの方には来てないの。」と僕は聞いた。

「あの事件があつて以来よ。両親が氣を遣つて、引っ越してくれたの。」とハルは言つた。「氣を遣つた」という表現に違和感を感じないでもなかつた。

「じゃあ、九年ぶりぐらいかな。」と僕は言つた。

「何で分かつたの？」とハルは言った。

「私、自分の年齢、言わなかつたと思うけど。」

「そういえばそうだね。でも何となく自分と同じかなあと思ったんだ。」実際、会つた瞬間からそう感じていた。そして今までハルは僕と同じ年齢だと確信していた。僕は自分の知らない間にそれほど、自分とハルを重ね合わせていたのだろうか。

「でも、正解だわ。私も一八歳だもの。」とハルは言った。

「そうだね。不思議だな。」

僕とハル。一八歳の少年と少女が自分探しの旅に出る。なんだか、二流映画のストーリーみたいだなと僕は思った。でも、そう思ふと、少しだけ気が楽になつた。

「懐かしい？」と僕は聞いた。言つてから、しまつた、と思った。俺は何を言つているんだ。ハルにはおそらく、懐かしいという感情も無いだろう。

「懐かしくはない。でも・・・・・。」

「でも？」と僕は先を促す。ハルの声が心なしか震えている気がした。

「怖い。怖いの。あの森にもう一人の私がいると思うと怖いの。どんどん怖くなつていく。」ハルは僕の腕をぎゅっと握り締めた。僕はハルを抱きしめた。周りから色々なざわめきが聞こえた。

「キヤー、アレナニヤッテンノ。」と若い女性。

「ホントニハズカシイワ、コンナトコロデ。」とおばさん。

「マツタク、サイキンノワカモノハ。」とサラリーマン。

見たいんなら、見れば良い、何かを言いたいなら、言えば良い、と僕は思った。お前等に何が分かる。笑つて、泣いて、怒つて、傷つく事の出来るお前等に何がわかる。ハルは傷付く事も出来ないんだ。傷つかないから、治らない。ハルの過去に出来た傷は治らないんだ。

僕はハルをいつまでも抱きしめていた。ハルは僕の腕の中で小さな子供のように、丸くなつっていた。

どれくらいそうしていただろう。やがて周りのざわめきは消え、静寂が訪れた。まるで世界にいるのは僕達二人だけのようだつた。僕が更に強く、ハルを抱きしめると、頭の中でズツという音がした。空気の質が変わつた気がした。無音の液体に包まれて行くような感触があつた。そこは熱くも、冷たくもなかつた。ただ、少し息苦しさを覚えた。喉がつまり、息が出来なかつた。抱き締めていたはずのハルの感触を感じなくなつていた。

「ハル。」僕は叫んだ。すると、視界が開け、新しい世界が現れた。

そこは森だつた。ハルが言つていた森だという事が肌で分かつた。靴の裏から湿つた地面の様子が伝わってきた。空を見上げた。森がまるで意地悪するように、青空を隠していた。いや、この世界では青空なんでものは存在していないのかもしぬれない。

「ハル。」と僕はもう一度、強く叫んだ。けど、僕の声はあまり、響かなかつた。森が僕の声を吸収したのかもしぬない。僕の声の代わりなのだろうか、森がざわめきはじめ、あちこちで鳥や動物が鳴く声が聞こえた。

僕はハルの名前を叫びながら、森を走り回つた。でも、いくらたつても進んでいる気にはならなかつた。木のツタが僕の体を傷つけ、茂つた葉の緑は方向感覚を狂わせ、森のかもし出す空気は僕の脳を犯していった。

僕はしゃがみ込んでいた。俺は何をやつてるんだ、ハルを手伝うんじゃなかつたのか。

後ろから僕の名前を呼ぶ声がした。

「ハル」と僕が言い、後ろを振り向いた。

そこにいたのはハル・・・・・・じゃない。早紀だ。

「あれ、ハルはどうしたのかしら。」と早紀は言つた。首筋を舐めるような甘つたるい声だつた。ハルの言うとおり、天使のように綺麗だつた。早紀が動くたびに、世界が彼女に微笑むかのようだつた。森は明らかに彼女の味方をしていた。

「ハルをどこにやつた。」僕は声を振り絞るようにして言った。

「ここ。」と早紀が言い、自分の心臓の部分を指した。

僕は完全に血が頭に昇っていた。僕は早紀に飛び掛けた。でも、飛び掛けた先に、彼女はいなく、僕は地面に倒れこんだ。

ハルはもういなくなってしまったのか。僕はハルを守れなかつたのか。

「殺して。」「どこからかハルの声がした気がした。僕は何故か空を見上げていた。茂った森に一箇所だけ穴が空いており、そこから一筋の光があちていた。僕はそれを全身に浴びていた。そこは暖かかつた。ハルの手に触れた時と同じ暖かさだった。僕は光の海を泳いでいるかのような気分だつた。

僕はゆっくりと頷いた。

「僕は君を殺すよ。」僕はゆっくりと、この世界に宣言するように言った。

森は僕の宣言を受け入れたかのよう、元のざわめきを取り戻していった。

早紀は、いや、ハルはゆっくりと頷いた。

僕はポケットからナイフを取り戻した。持つて来たわけではないが、ポケットの中にナイフがあることは分かっていた。僕は勢い良く、ハルに向かって駆け出した。両手でしっかりとナイフを握んで。ズブツという音がしてナイフがハルの体に入りこんでいった。暖かい血がそこから流れ始めた。暖かいな、ハルの血は、なんて場違いな事を僕は考えていた。

「ありがとう。」ハルが切れ切れの声で言い、笑つた。それは本当の、ハル自身の笑いだつた。作ったものではなく、心の底からの笑みだつた。僕にはそれが痛いくらいに分かつた。そして僕は気付いていた。この笑顔がハルの最後の微笑みだという事に。

僕はハルからナイフを抜いた。血が勢い良く飛び出て、僕にかかりつけた。

「ハル、ありがとう。」と僕は言った。でも、もうその時にはハ

ルはいなかつた。

森が僕を追い出そうとしていた。世界が揺らぎ、僕は元の世界に押し返された。暗闇がやってきた。でも、それは僕が慣れ親しんだ暗闇とは少し違つた種類のものだつた。

気がついた時、僕は一人で電車に乗つていた。僕以外の人々は全くいなかつた。僕は横を見た。ハルが座つていた場所だつた。ハルはいなかつた。

電車に揺れながら、僕は目を閉じた。

大丈夫だよ、ハル。君は一人じゃない。僕が今すぐ行くからね。僕は目を閉じ、深く、沈んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6340f/>

---

ハル

2011年1月27日10時37分発行